11 月第 4 週の礼拝説教

■日　時：2023 年 11 月 26 日（日）10：30－11：30　降誕前第 5 主日
■説　教： 保科けい子牧師
■説教題：「 今おられ、かつておられ、やがて来られる方 」
■聖　書　新約：ヨハネの黙示録 1 章 4～8 節（新約 p452）
■讃美歌：83「 聖なるかな、聖なるかな、 」
　　463「 わが行くみち いついかに 」

教会の暦は 1 月 1 日からでなく、約 1 か月早い待降節から始まります。11 月 30 日に最も近い日曜日からクリスマス前日までの約 4 週間を待降節と呼びます。今年の待降節は、年の巡りとしては一番遅くなっており、待降節第 1 主日は来週の 12 月 3 日（日）からです。そして、待降節は 4 つの主の日からなっていますから、今年の待降節第 4 主日は 12 月 24 日になります。そうしますと、主の日としては本日 11 月 26 日がこの一年の最後となります。そのような意味も考慮して、日本基督教団の聖書日課も本日は聖書全体 66 巻の最後、あるいは新約聖書 27 巻の最後に位置しているヨハネの黙示録を取り上げているのかもしれません。しかし、私たちの多くは 12 月 31 日を大晦日と呼び、一年の来し方を振り返って新年に向けた心備えをするというような慣習の中で生活しています。そのような中で、今年は本日の主の日を古い年の最後と考えて、この一年の来し方を振り返ってみたいと思います。そして、来週から主に導かれる新しい年が始まるという新たな希望を抱いて、心を新たにして歩み出したいと願っています。

ところで、コロナ禍以前には、多くの教会ではクリスマス礼拝後に愛餐会やお茶の会などをし、楽しみの時を持ちました。今でも思い出すのは、ある教会で担当の長老が聖書についてのゲームをしたときのことです。聖書は何巻あるかとか、共観福音書と呼ばれるのはどれかなど、いくつかの問いがありましたが、その中で「聖書の書き出しの言葉は何か」「聖書の結びの言葉は何か」という質問がありました。書き出しは、創世記の１章１節ですから「初めに、神は天地を創造された。」なので、かなりの人が手を挙げ、指名された方は正解でした。しかし、結びの言葉は手を挙げる方がいませんでした。その時の私はすでに牧師でしたから、誰も答えられなければ指名されてしまうかもしれない、とおびえていました。その時、夫が手を挙げて、ヨハネの黙示録の最後にある「アーメン、主イエスよ、来てください。」という言葉であると答えました。もし、私が指名されていたら同じ答えを言ったかもしれません。ゲームの司会者である長老は笑いながら、「聖書の専門家である牧師でも間違うのだから、私たちが分からなくて当然ですよね」と正解を言いました。それは、ヨハネの黙示録22章21節の「主イエスの恵みが、すべての者と共にあるように。」という祝祷の言葉でした。けれども、牧師であっても、

ヨハネの黙示録の結びの言葉は「主イエスよ、来てください。」であると勘違いして記憶してしまうほどに、ヨハネの黙示録と主イエスが「**やがて来られる方**」であるということが深く関連しているのです。

さて、本日の聖書箇所であるヨハネの黙示録１章４節から８節は、１章の見出しとして記されている説明によれば「挨拶」の部分になります。新約聖書の中のパウロのいくつかの手紙などを見ると、まず差出人の名前と宛先が記されて、そのあとに内容に入っていくのですが、ヨハネの黙示録は１章１節で「黙示」という言葉の説明をしています。それは「神のご計画の中ですでに決定されている「すぐにも起こるはずのこと」」であるというのです。それを述べたうえで、４節から８節で「挨拶」を記しています。ここには、黙示録の著者ヨハネからのアジアにある七つの教会への挨拶があり、その内容は、七つの教会に属するすべての者に対して、「イエス・キリストから恵みと平安があなたがたにあるように」という祝福です。この祝福の言葉は、先ほど紹介したヨハネの黙示録の結びの言葉とも重なるところがあります。使徒パウロもその手紙でよく使っています。そして、「七つの教会へ」という宛先の「七」という数字は聖書の中では完全数と考えられています。ですから、これら七つの教会はアジア州にあった現実の教会であると同時に、すべての教会を表しているとも考えられます。そのように考えると、黙示録で記されている事柄は、今日の私たちの教会、ひいてはその教会に集う私たちにも関係があるのです。「七」という数は黙示録で数多く使用されています。1 章だけでも「七つの教会」「七つの金の燭台」「七つの星」という言葉が用いられています。さらに、1 章 5 節後半～6 節は、「**わたしたちを愛し、御自分の血によって罪から解放してくださった方、 わたしたちを王とし、御自身の父である神に仕える祭司としてくださった方**」すなわち、主イエス・キリストへの賛美が語られています。「**栄光と力が世々限りなくありますように**」と賛美するときの「栄光」も「力」も主なる神の本質を語っているように思われます。そして、その賛美の結びは「アーメン」になっています。主なる神様をほめたたえる頌栄の結びの言葉として、「本当にその通りです。真実です。」と心から発しているのです。

ヨハネの黙示録の著者ヨハネが最初にどうしても宣言しておきたかった事、それが 7 節で旧約聖書のダニエル書 7 章とゼカリヤ書 12 章を用いながら語られている預言です。
「見よ、その方が雲に乗って来られる。
　すべての人の目が彼を仰ぎ見る、
　ことに、彼を突き刺した者どもは。
　地上の諸民族は皆、彼のために嘆き悲しむ。
然り、アーメン。」と記されています。ヨハネが見たことは、主イエスは旧約聖書で預言されているように雲に乗ってもう一度帰って来られる、ということでした。そして彼

は、主を信じる者たちもまた主を信じない者たちも、主イエスが再臨されるときにはこの方の姿を仰ぎ見ることになる、と語ります。8節では「**神である主、今おられ、かつておられ、やがて来られる方、全能者がこう言われる。**」ともう一度ヨハネが見ているお方について繰り返します。そして、そのお方は「**「わたしはアルファであり、オメガである。」**」と宣言されたことを語っているのです。この神は、私たちに伴ってくださる聖霊として今も生きておられるお方であり、この世の初めからおられて、この方によって世界は創造されたのです。そして、このお方はやがて世界を全く支配し完成されるお方です。アルファとはギリシャ語のアルファベットの最初の文字、オメガは最後の文字です。つまりこの方は、神である主、最初であり最後である方、物事を始め完成してくださる方なのです。私たちが待降節に待ち望む方、それはその主なる神の独り子主イエス・キリストです。私たちは主の日ごとの礼拝で、使徒信条を告白しています。主イエス・キリストに関しては、「主は聖霊によりてやどり、おとめマリヤより生まれ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られ、陰府にくだり、三日目に死人の内よりよみがえり、天にのぼり、全能の父なる神の右に座したまえり。かしこよりきたりて生ける者と死にたる者とを審きたまわん。」と告白しています。主なる神が私たちの現実の歴史に介入して来られた出来事、それが主イエス・キリストの誕生であり、主イエスは真の人間として成長され、十字架の死と復活を経て昇天し、主なる神の右に座されました。そして今、私たちは次週の12月3日（日）から始まる待降節の中で、主イエス・キリストの降誕を確認するためにクリスマスを待ち望み、この世を救い完成されるために再臨される全能者主イエス・キリストを待ち望みます。繰り返しますが、本日は主なる神様が導いておられる一年の最後の主の日です。主イエス・キリストの救いを共に確信しながら、今年一年の間に与えられた多くの恵みを数えつつ過ごしたいと思います。